

青年期のジッドとヴァレリー：ふたりの関係は「危 うい友情」だったのか

吉井，亮雄
九州大学大学院人文科学研究院教授

<http://hdl.handle.net/2324/19169>

出版情報：仏文研究．吉田城先生追悼特別号，pp.171-181，2006-06-20．京都大学フランス語学フランス
文学研究会
バージョン：
権利関係：



青年期のジッドとヴァレリー

——ふたりの関係は「危うい友情」だったのか——

吉井亮雄 Akio YOSHII

19世紀末フランスの知的青年層の精神風土を象徴するとともに、新世紀の文学や思想の潮流を準備した事柄として、アンドレ・ジッド、ポール・ヴァレリー、ピエール・ルイスの3者が交わした友情の重要性はあらためてここで説くまでもあるまい。前2者についてはすでに書簡集が公刊されていたが、一昨年、残りの往復書簡すべてをカバーする大部な『三声の往復書簡』が出版され、彼らの相互交流の具体相がいつそう鮮明なものとなったのは喜ばしいことであった。このような新資料の出現と相前後して我が国では、とりわけヴァレリーへの関心が高まっているようだ。清水徹の画期的著書『ヴァレリーの肖像』の出版につぎ、昨秋、雑誌「現代詩手帖」が4半世紀ぶりにこの詩人の特集号を組んだのもその顕れと言えるだろう¹⁾。

精神医学者として著名な中井久夫によるヴァレリー関連の業績もこういった流れのなかに位置づけられる。『若きパルク／魅惑』の邦訳（初版1995年、改訂普及版2003年）で清新なヴァレリー像を提示し、また先の雑誌特集号にも、我が国の代表的なヴァレリー研究者らに伍して、散文詩9篇の翻訳と、『カイエ』の挿絵にかんする論考を寄せている。精力的に成果を公表するその姿勢には賛辞を惜しむものではないが、小論では中井自身が一般読者にも参照を請うている論文「ポール・ヴァレリーと青年期危機」（『こころの科学』、第123号）の一部を批判的に検討したい。同論文中ジッドとの交友について論じた部分には、にわかには賛同しかねる指摘・解釈が散見するからである。ちなみに論文全体は、1891年にヴァレリーを襲った危機の原因が、ひとつにはロヴィラ夫人への「無内容な片思い」、またひとつには「ジッド、ルイス、特にジッドとのきわどい友情」「危うい友情」であったという基本的認識のもと、その双方を時間の流れに沿って考察している²⁾。このうち小論が後者のみを検討の対象とするのは、筆者がヴァレリー研究、就中その実証的蓄積に疎く、学力不足を強く自覚するからにほかならない。では、さっそくジッド関連部分の書き出しを読むことから始めよう——

〔1891年〕3月から往復書簡は次第に愛情表現が多くなる。始まりはヴァレリーからで、20歳に満ちたヴァレリーはジッドに無邪気な憧れを抱いたようであり、ジッドが執筆中であることを宣伝している『アンドレ・ワルテルの手記』の原稿を読ませてもらえなかったことにすねてみせたりしている。ジッドもこれに応じて、「貴君を大好きだ」「パリに来てくれたらと思うのは……そばにいてもらいたいからだ」と書き送っている。

ふたりはパリのホテルで会い、ジッドが詩を朗読し、ヴァレリーはそれを聴く。3月11日のヴァレリーの手紙は、その思い出を感傷的に記して、ほとんど恋文である。これにジッドは10日おいて返事する。それは、すでに同性愛の経験者である年長のジッドが、親密になるとはどういうことかを示唆して、おぼこのヴァレリーに「われに触るるなかれ」と警告する手紙である。[113]

前段の「『アンドレ・ワルテルの手記』の原稿」は、出来して間もない同書刊本の誤り。また後段冒頭の「パリのホテル」というのも、あきらかに、前年の暮ふたりが初めて会い、輝かしい友情がはじまったモンペリエでジッドが投宿したホテルの誤りである³⁾（不思議なことに、中井論文にはこのモンペリエでの初対面への言及がほとんどない）。だが引用文中とりわけ驚かされるのは「1891年にはすでに同性愛の経験者であったジッド」という箇所だ。早くもここに決定的な事実誤認がある。というのも当時ジッドはまだ、男女を問わず性交渉というものをまったく経験していないからだ。2年後の1893年3月、彼は『日記』に次のように書き記す——「私はこの23の歳まで完全に純潔ではあるが荒んだ生活をしてきた。そして狂おしくなって、ついに唇を押しつけることのできる何か肉の切れ端はないかといたるところ探し回った⁴⁾」。ジッドが告白するのは、まさに『アンドレ・ワルテル』の主題を形成していた、そして今もってなお止まぬ、精神的純粹の希求と抑えがたい肉の欲望との相克である。従姉マドレーヌ・ロンドーの存在は純愛の化身として聖別化されるが、これにたいし沸々と滾る性的欲求のほうはいまだ確かな対象をもちえず、それが闇雲にも向かう先は人の姿をなさぬ「肉の切れ端」でしかない。厳格なプロテスタント教育によりかくのごとく歪められた「性本能の再教育⁵⁾」を目的として、ジッドが同年10月、友人の画家ポール＝アルベール・ローランスを旅の道連れに、地中海をこえ北アフリカに渡った経緯は自伝『一粒の麦もし死なずば』が詳細に語るところ。そして翌月、チュニジアのスースで案内役の少年アリと図らずも持った性体験が、彼にとっては初めての肉体の解放となる。だが、この時点ではジッドは自らを同性愛者とは見なしておらず、その後まもなくビスク

ラで家を借りウレッド・ナイル族の少女メリアムをローランスと共有する生活を送っている。碩学クロード・マルタンが断言するように、ジッドが肉体の要請にたいし精神の全面的同意を与え、己が同性愛者であるとうやうやく自覚したのは、1895年初頭に出かけた2回目の北アフリカ旅行においてであった⁶⁾。いっぽうヴァレリーが友人の性的傾向を1902年にいたるまで長らく知らずにいたことは、同年7月30日にジッドがアンリ・ゲオンに宛てた書簡の記述から疑いを容れない。この書簡は、ゲオンがひと月ほど前、画家のジャック＝エミール・ブランシュに不用意にも漏らした同性愛者ジッドの話題が、巡りめぐってヴァレリーの耳に入ったことを若干の恨みをこめて報告しているのだ。ジッドによれば、ブランシュとはほとんど面識のないヴァレリーは「アンリ・ド・レニエやアンドレ・ルベイ、ピエール・ルイスらよりも後に、そして彼らをつうじて初めてそのことを知った」のである⁷⁾。

これらの点だけをとってみても、中井がジッドの同性愛にかんし実証的事実や先行研究を十分に考慮・尊重しているとは思われないが、主としてジッド＝ヴァレリー往復書簡の読みにもとづく彼の指摘や見解には、いくぶんかなりとも実質的なメリットを認めうるのだろうか。以下、中井論文の要点をかいつまんで紹介し、その正否を検討しよう。

先の引用文に次いで中井は、「ジッドの『日記』は〔…〕マルセル・ドルーアンという少年を至上の対象として熱愛していることを記している」が、1891年の夏を境に、同性愛の対象はこのドルーアンからヴァレリーへと変わった、と強く示唆する [114]。言うまでもなくドルーアンは、ルイスをつうじて1890年にジッドと親交をむすび、97年にはマドレーヌの妹ジャンヌ・ロンドーとの婚姻によってその義弟となった人物。また1908年から翌年にかけては、ジッドやゲオン、ジャン・シュランベルジェらとともに「新フランス評論」誌を創刊したことで知られる。当時19歳、ヴァレリーと同年のこのドルーアンを「少年」と呼ぶのは、中井の事実誤認によるのか、あるいは意図的な操作なのか、いずれにせよ結果的に読者の意識を「少年愛」へと誤って誘導しかねぬ不正確な表現である。ジッドの『日記』が実際に語るのは、高等師範学校に首席で合格するなど、ドルーアンが学業優秀であったのを親友として誇らしく喜んだというだけのこと⁸⁾。またルーアン市立図書館が所蔵する数百通のドルーアン宛ジッド書簡（未刊）を通読するかぎり、そこでもふたりの同性愛関係を仄めかず記述は皆無だと断言しうる。それどころかジッドは、先に引用した1893年の『日記』の一節「私はこの23の歳まで完全に純潔、云々」とほとんど同一の文言を、時おなじく、まさにドルーアンその人に書き送っているのである（同年

3月18日付書簡)。さらに付言すれば、ドルーアンがジッドの性的傾向を知ったのは、まず間違いなく、同性愛弁護の書『コリドン』の私家版初版(1911年)を読んだことで、そのさいの彼の反応は、義兄が同書の著者であることが世間に知れば、教育者としての自らの経歴に差し障りが生じるのではないかという危惧が主たるものであった。

さらに続けて中井は言う——「ヴァレリーはジッドに(婚約者である従姉の)『E(エマニュエル)の傍にとどまるべきです』とも書く。この婚約は長く、4年にわたり、同性愛の隠蔽に役立った。「エマニュエル」は言うまでもなくマドレーヌの仮名。たしかに引用された短い一文だけを見れば、ヴァレリーは彼女を引き合いに出すことでジッドの求愛にたいし「逃げを打とうとした」、そう取れなくはない。だが中井の引用がいかに文脈を無視したものであるかは、これに先立つ8月末のジッド書簡を参照すれば一目にして瞭然である。すなわちジッドは、翌月中旬にマドレーヌがラ・ロック滞在中の自分を訪ねてくるので、ヴァレリーとパリで会うのが難しくなり思案に暮れている旨を知らせていた。これにたいしヴァレリーは、私とはまた他日会う機会があろうから、今回は遠慮なく貴兄の愛する従姉との予定を優先されたし、と答えたにすぎないのである⁹⁾。また、マドレーヌとの婚約が成ったのは1895年、ジッドの母ジュリエットがこの世を去ってからのことで、それまで彼女は一貫して婚約・結婚にたいし拒絶の姿勢を崩していなかった。あらためて指摘するほどのこともない周知の伝記的事実である。

中井論文の特徴は大胆な推測をためらわない点にある。以下はそれが最も顕著にあらわれた箇所(ここはまた同論文ジッド関連のクライマックスと呼ぶべき箇所でもある)——

10月15日、ジッドは上京しているヴァレリーの定宿に、葉書で「明日土曜日に上京するから(午後)4時半から5時までオデオン座のアーケード下をぶらつくこと。私はそこにいる」とデートの時と場所を指定する。おそらく同性愛者のためのホテルをジッドは知っていて、この日にふたりはそこに泊まったとみられる。[…]

[11月3日のヴァレリー宛書簡でジッドは]「存在感 *sentiment de la Présence* で十分ではないだろうか。相手がそこにいるということ、誰か他者がいるということを知っていることで。僕は人が〈アムール(セックス)をする *faire l'amour*〉ように〈アミティエ(友情) *faire l'amitié*〉をしたかったんだ。滑稽だろ。僕が〈セックスをしたく〉ないから、ああなったんだ」と書いている。

その一夜に何が起ったのだろうか。何ゆえの弁明だろうか。おそらくジッドは

リードに失敗し、ことは不首尾に終わったのである。それゆえ、ふたりは並んで横たわり、まんじりともせず一夜を明かしたのであろう。30年後のヴァレリーは「ナルシス断章Ⅱ」において「……同じ夜を泣き明かして瞑った眼が入り交じる／同じすすり泣きに組んだ腕が／いつでも愛に溶けようとする同じ心ひとつを締めつける……」と、〔…〕書いている。これはパリの一夜の記憶が下敷きになっているのではないか。
[114-115]

オデオン座が位置するのは歴としたカルチュ・ラタン的一角、パリ随一の文教地区である。しかもジッドが生まれたメデイシス通り（現在のエドモン・ロスタン広場）や、その後移り住んだトゥールノン通り、当時の住所コマーユ通りは、いずれもが同劇場からは徒歩数分の至近距離。ジッドにとってまさにここは、道を歩けばたちまち知人に会う生活の場、馴染みの界限なのである。常識的に考えれば、その筋の「発展場」なぞ求めようもない。にもかかわらず中井は、ジッド書簡の「ランデヴー」（アポイントメント）という語を「デートの時と場所」と訳して微妙な意味合いを付与し、また架空の「パリのホテルでの出会い」（先述のようにモンペリエのホテルとの混同）を余韻としてひきずり利用しながら、「ふたりは同性愛者向けのホテルに泊まった」と推測するのだ。そのさいに最大の根拠とされるのが、書簡中の一節、*« J'ai voulu jusqu'alors faire l'amitié, comme on "fait l'amour". / C'est ridicule. Cela vient de ce que je ne veux pas faire l'amour.¹⁰⁾ »*。これをもとに中井は、「ジッドは異性との性交渉が嫌で同性愛に傾いた。しかし結局はヴァレリーとの性交渉を完遂することはできなかった」という驚くべき解釈を導き出しているのである。だが、ここでも文脈は完全に無視されている。一節に先立ちジッドは次のように書いていたのだ——「ジョルジュ・サンドを8巻、読み終えたところです。そのせいで、恋愛（これにはもう前から少々うんざりしていたのだが）とか、あらゆる感傷的なものには吐き気をもよおす次第。〔…〕今では、親密な関係はごく少数の人々との間にしかありえないし、また望ましくもないと分かる（なんたることか、僕ときたら万人と親しくなりたかったのだ！）。そもそも親密な関係とは欲すべきものなのだろうか¹¹⁾」。この話の流れからすれば、問題の箇所は「以前の僕は誰とでも広く、恋愛でのような親密で感傷的な友人関係を望んでいた。滑稽なことだが、恋愛には気が乗らないからそんなふうになったのだ」ということにすぎない。*« faire l'amour »*なる表現が使われているのは、あくまでも、卑俗な語義を意識的に重ねた言葉の遊びなのである（強調や引用符の使用もその顕れ）。このような書簡記述の遊戯的側面を解さず、文脈無視の引

用によってフィクションを捏造するくらいなら、むしろ「リュクサンブールが甦ってくる。其処の彫像にもまさる僕らの影とともに¹²⁾」という、10月27日のヴァレリー書簡の情感あふれる記述に目を留め、オデオン座と道を挟んで向かいのリュクサンブール公園での対話、あたかもあのモンパリエ植物園の美しい記憶と共鳴するがごとき夕刻の対話をイメージするほうがはるかに自然であろう。しかも、ありもしない出来事をはるか遠く30年後の詩句の発想源と推測するにいたっては、もはや何をか言わんや。

上記のヴァレリー宛書簡では留保を付されているものの、他者にたいする「共感」はジッドの生涯をつうじての常数であったことを指摘しておこう。この心的特性はとりわけ青年期には過剰なまでに発現し、周囲の者たちは、たとえそれが「誠実」の要請によるものだとは承知しながらも、訝しきや不安を覚えることが少なからずあった。マドレーヌの場合がその典型例で、彼女はジッドの20歳の誕生日に本人に宛て次のように書き送らねばならなかったのである——

ご存じかしら、どのようにしてあなたが次々にルイスになり、アンドレ・ワルクネルになり、マドレーヌ等々になれるのか——彼らの趣味や好みを代わるがわる共有できるのか、しかも、すべて同じ誠実さをもって！ […] こんなふうにあらゆる色彩を容易に反映できるとは少しひどすぎます……これではまるでカメレオンです。このように際限なく満遍なく他人を受け入れていては、あなた自身の趣味はどこにあるのでしょうか。私にはよく分かりません。おそらくあなたは自分の融通性を広げに広げて、しまいには自分の見識を無にしてしまうのです¹³⁾。

いっぽうジッド自身は、このプロテウスの精神傾向を基本的には己の独自性を保証する一大要素として肯定的にとらえつづけた。10月初旬の「貴兄は根っからの娼婦だ」(ヴァレリー)、「僕がそうならざるをえないことは分かっているではないか」(ジッド)というやりとりも、かかる側面に由来するのであって、中井が見るような同性愛感情が介在しているためではない。

さて、先の主張に続けて中井は、話題をジッドの性愛活動全般へと広げ、ヴァレリーとの逢瀬の「不首尾」を説明しようとする——

ジッドはなぜ不首尾に終わったのか。ジッドは性愛の相手が自分より劣った者でなければならぬ。これはほぼまちがいない。老いたるジッドは植民地の少年をなりふりかまわず追いかけている。男女を問わない。崇拜する従姉を妻にして手を触れず、

さしたる程でない女性に子を生ませている。ジッドはすでにヴァレリーに一目置いていたのではないだろうか。[115]

「ジッドにとって性愛の相手は劣等者である」。このような捉え方ではジッドの性愛美学を決定的に読み誤ってしまう。たとえばスースでの初めての同性愛体験を想起しよう——「服が落ちた。彼は上着を遠くへ投げ捨て、神のような裸で立ち上がった。〔…〕彼の体は熱気を帯びていたかもしれないが、私の手には日陰のように涼しく感じられた。なんと砂が美しかったことか！ 夕暮れの愛すべき壮麗さのうちに、なんと美しい光線が私の歓喜を被い包んだことか！¹⁴⁾」。かくのごとく『一粒の麦もし死なずば』が回想のうちに描くジッドは、貧しい現地の少年に支配者的態度で接する西欧人旅行者などではない。そこに現れるのは、輝くばかりに美しい褐色の王子の傍らに感動をもって傳く従者の姿なのである。後年の熱愛の対象マルク・アレグレを謳った一節、「少年は驚くほど美しかった。まるで恩寵に包まれているかのようだった。シニョレなら〈神々の花粉〉に被われていると言ったことだろう、云々¹⁵⁾」もまた然り、我を忘れ陶然と少年に見入る男の姿は、偶像を崇める信徒の姿であって、けっして力と技で獲物をしとめる獵人のそれではない。盟友シュランベルジェの末弟モーリスをゲオンとふたり校門の前で今か今かと待ちわびる姿もまた同様、恋する虜の滑稽なまでの一途さの顛れでしかないのである¹⁶⁾。いっぽう話を女性との関係に移せば、ジッドとのあいだに娘カトリーヌをもうけたエリザベート・ヴァン・リセルベルグのことを、どのような理由で「さしたる程でもない女性」と呼びうるのか。彼女の母マリアが書き残した膨大な『プティット・ダムの手記』や、数年前に公刊された母宛書簡集から浮かび上がるエリザベートの人物像は、中井の安易な断定を許すような卑小なものとはどうてい思われぬ¹⁷⁾。これらいくつかの確固たる反証を前にするかぎり、「少年や女性は劣った者」という前提こそはむしろ中井自身の価値観の投影であると見なさざるをえまい。またジッドが早くからヴァレリーに「一目置いていた」のは、文学史家たちが斉しく認めるところ、ふたりの往復書簡のみならず、『三声の往復書簡』によって全貌が公になったジッドのルイス宛書簡からも容易に窺われるところであって、そのことの根拠をあらためて虚構の性愛（の不首尾）に求める必要などこにもない。言わずもがなの結論を導くために中井が踏んでみせる推測の手順は、まずもって論理の体をなしていないのである。

以上がジッド関連部分前半の紹介と検討であった。いっぽう、主として1891年末から翌92年の交友を論じた後半部の内容は、中井自身の次の評言におおよ

そ要約しうる——

以後のジッドの書簡は饒舌になり、隠れた毒を帯びる。〔…〕ジッドはヴァレリーに賛辞を送るが、その中に致命的な刺し針があり、友情を強調するそれが相手を追いつめる布石となっている。それはまさに相手を金縛りにする「二重拘束」というべく、すでにかなり悪化していたヴァレリーの精神状態をさらに悪化させたとは私は見る。

[115]

このような観点に立つ以後の論述は、前半部ほどには致命的誤謬に満ちたものではないが、それでも両者の同性愛感情のなりゆきを追うことが主題であるため、前提からしてすでに説得的な議論は期待しがたい。文脈を考慮せず書簡記述の意味を歪曲する傾向も変わることがない（訳文の意図的な操作は、たとえば二宮正之訳『ジッド＝ヴァレリー往復書簡』のそれと並べてみるだけでも簡単に確認できる）。またジッドの青年期の親友で、家業の酪農を継ぐため早くに文学の世界を離れたモーリス・キヨのことを「ジッドの愛人」[117]と呼ぶなど、明らかな事実誤認もいくつか見うけられる。だが、そのような誤りや欠陥を逐一あげつらうことに、もはやさほどの意義は認められまい。ジッドの同性愛にたいする偏った先入観や、伝記的・実証的な情報をはじめとする専門的学力の不足はさておき、中井説のような誤解を許す要因がほかにもあるとするならばそれは何か、この点にかんし一言することで小論の締め括りとしたい。

中井の解釈を誤らせた最大の原因は、彼が主たる依拠資料とする青年期のジッド＝ヴァレリー往復書簡の性格、とりわけその記述の遊戯的側面を考慮せず、両者が交わす言葉をすべて字義どおりに解している点ではあるまいか。もちろん往復書簡の内容の大半を占め魅力の核をなしているのは、文学への純粹で真摯な思いであり、いかにも若者らしい熱い感情の表現である。また互いの文面には青年期特有の蹉跎や、相手への劣等意識、嫉妬心なども見え隠れする。だが、これらと並行して頻繁に書簡の記述を飾る冗談やお巫山戯、言葉あそびの要素を軽視することは許されまい。両者にルイスをくわえた交友の記録『三声の往復書簡』は、少なくともジッドがルイスと事実上の絶縁関係に入る1895-96年までの数年間については、まさにそのすべてが真剣さと遊びとのアマルガムと呼ぶうるものなのである。しばしば奇妙な綽名をつけ合って戯れる3人の青年は、その点においてはなにも特別な文学エリートなのではない。時として若い女性どうしが「男ことば」を使い、逆に若い男性どうしが「お姉ことば」を使って親密さを表すように、彼らの場合も擬似的な性の転換に暗黙裡に合意

することもあれば、また一種の演技として粗暴な言辞や猥雑な冗談を交わすこともあるのだ。むろん、かかる交友が常というわけではない。特にジッドの場合、相手次第で様相が大きく変化することは、信仰上の話題が中心を占めるクロードとのやりとりを挙げれば直ちに了解されよう。そのような可変的「人物形象」を評してクロード・マルタンは次のように述べている——「ジッドにとって友情を温める、文通を続けるとは、すなわち一つひとつ別個の道を辿ること、個々の友人とともに、個々の友人のおかげで、ある一つの方向にむかって進むことなのだ。[...] ジッドがよく口にしていたように〈友情を育む faire l'amitié〉ことは、愛の営み (faire l'amour) と同じく他者とともに、そして他者のおかげで何かをつくりだす行為なのである¹⁸⁾」。中井が提示する解釈は、つまるところ、この「ある一つの方向」を読み誤った結果であると言わざるをえない。

注

- 1) 本段落で言及した文献・資料のレフェランスは次のとおり—— André Gide - Pierre Louÿs - Paul Valéry, *Correspondances à trois voix, 1888-1920*. Édition établie et annotée par Peter Fawcett et Pascal Mercier. Préface de Pascal Mercier. Paris : Gallimard, 2004 ; 清水徹『ヴァレリーの肖像』, 筑摩書房, 2004年 ; 「現代詩手帖」第48巻・第10号, 特集「ヴァレリーの新世紀」, 2005年10月, 9-151頁。
- 2) 中井久夫「ポール・ヴァレリーと青年期危機」, 「こころの科学」第123号, 2005年9月, 109-121頁 (このうち主としてジッドが関連する部分は113-117頁)。同論文からの引用にあたっては、本文中 [] 内にその頁数を記す。ただし同一頁が近接して連続するばあいには、最初の引用にのみレフェランスを付す。
- 3) 中井が叙述の根拠とする3月11日のジッド宛ヴァレリー書簡にも、はっきりと「12月のあの夜に貴兄が読んでくださった詩、云々」(André Gide - Paul Valéry, *Correspondance 1890-1942*. Préface et notes par Robert Mallet. Paris : Gallimard, 1955, p. 67) とある。
- 4) André Gide, *Journal, I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric Marty. Paris : Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, p. 159.
- 5) André Gide, *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et voyages*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre Masson, avec la collaboration de Daniel Durosay et Martine Sagaert. Paris : Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, p. 286.
- 6) クロード・マルタン『アンドレ・ジッド』(吉井亮雄訳), 九州大学出版会, 2003年, 99頁参照。周知のように、ジッドが自らの性的傾向をはっきりと自覚したのにはオスカー・ワイルドの関与が決定的であった。とはいえ、彼はこの性的傾向を矯正不能なものとは考えず、同年6月、従姉マドレーヌと婚約を交わすにあたって、前もって受けた医師の診断を信じ、この性的傾向は結婚とともに次第に消えていくと依然期待していたのである。
- 7) Voir André Gide - Henri Ghéon, *Correspondance 1897-1944*. Texte établi par Jean Tipy. Introduction et notes d'Anne-Marie Moulènes et Jean Tipy. Paris : Gallimard,

青年期のジッドとヴァレリー

- 1976, t. I, p. 453. 引用文中の強調は原文どおり。書簡によれば、ジッドは噂が流通した経緯をヴァレリー自身から聞き知った。
- 8) Voir Gide, *Journal, I (1887-1925)*, op. cit., p. 136 (30 juillet 1891).
 - 9) Voir Gide - Valéry, *Correspondance 1890-1942*, op. cit., pp. 121-122.
 - 10) *Ibid.*, p. 134.
 - 11) *Ibid.*, p. 133.
 - 12) *Ibid.*, p. 132.
 - 13) Lettre du 21 novembre 1889, reproduite par Jean Schlumberger dans son livre *Madeleine et André Gide*, Paris : Gallimard, 1956, pp. 27-28.
 - 14) *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et voyages*, op. cit., p. 280.
 - 15) *Journal, I (1887-1925)*, op. cit., p. 1037 (21 août 1917).
 - 16) Voir Gide - Ghéon, *Correspondance 1897-1944*, op. cit., t. I, pp. 60-75 (« Corydon » et ses miroirs ». なお1907年夏の同性愛体験を綴った『森鳩』(André Gide, *Le Ramier*, Paris : Gallimard, 2002) は、小品ながらジッドの性愛美学の証言としてとりわけ注目に値する著作である。是非ご参照いただきたい。
 - 17) Voir surtout Élisabeth Van Rysselberghe, *Lettres à la Petite Dame. « Un petit à la campagne » (juin 1924 - décembre 1926)*. Textes choisis et présentés par Catherine Gide. Paris : Gallimard, « Cahiers de la NRF », 2000. ジッドとエリザベートとの関係についてはいまだ十分な検討がなされているとは言いがたいが、かつてのように「ただ単に子どもをつくるためだけの関係であった」と説く者は、少なくとも第一線のジッド研究者のなかにはもはや存在しない。マドレーヌとの場合とはまた異なるが、なんらかの愛情が介在したことは確実であると見なされている。
 - 18) クロード・マルタン前掲書, 235頁 (公刊した拙訳をここでは若干改変した)。

(よしい・あきお 九州大学大学院人文科学研究院教授)